

序章 なぜ非科学主義信仰を知るべきか

アメリカが迷走を続けている。二〇二二年二月以降、ロシア軍の侵攻により混乱しているウクライナ情勢をめぐって、アメリカは自由主義陣営の盟主としての存在感を示せていない。ウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領の毅然とした姿勢が報道されることはあっても、ジョー・バイデン大統領のリーダーシップが発揮されているという報道は少なくともアメリカでは見たことがない。

リーダーシップを発揮できない理由の一つが国内での支持基盤の脆弱さだ。バイデン政権は史上まれに見る低支持率に苦しんでいる。二〇二一年一月の就任以降に起きたことを振り返ると、外交・安全保障面では、アフガニスタンからの米軍撤退で現地の治安情勢が一気に悪化した。メキシコ、エルサルバドル、グアテマラなど中南米諸国からアメリカ

を目指す移民の流れはとまらない。一方、国内情勢を見れば、インフラ整備など肝いりの景気対策は思うように実行できず、急激なインフレへの対応についての評価も厳しい。これについて、バイデン大統領の実行力の低さに原因があるという分析は間違っていない。しかし、これはバイデン大統領という政治家の資質だけが大きな理由なのだろうか。もっと構造的な問題が根底にあるはずだというのが筆者の問題意識である。

筆者がNHKの特派員としてアメリカに初めて駐在したのは、バラク・オバマ政権時代の二〇〇九年から二〇一二年までで、その時はニューヨークだった。その後、二〇一九年から現在（二〇二二年）まで今度はロサンゼルスに駐在している。一回目と二回目の駐在を比較して実感するのは、アメリカ社会がこの一〇年で大きく変質したことだ。以前のアメリカは自由、平等、民主主義といった理念を旗印に一つの国家としてまとまってきた。その大いなる実験は成功し、国民は世界最強の国家としての恩恵を享受してきた。しかし、中国の台頭などによりその絶対的な優位性に陰りが見える中、これまで国民を統合してきた理念が揺らぎ、疑念を持つ人が増えている。ゲームに勝っている時は、自分たちのセオリーが正しいと信じることは容易だが、ひとたび調子が悪くなると、その自信にも揺れが

生じる。今や共通の理念を失ったアメリカ国民は、国家が新しい問題に直面するたびに二つの対立するグループに分かれるようになった。新型コロナウイルスワクチン接種の是非しか然り、マスク着用のは非然り。移民受け入れのは非、銃規制のは非、人種差別など古くから存在する問題をめぐる対立は変わらず、むしろ先鋭化している。メディアが両者の動きを伝えることで対立は増幅され、「アメリカ社会の分断」などという常套句じょうとうくで報じられる。「南北戦争の再来」、「アメリカ国内は内戦状態」などと挑発的な言葉を使うメディアもある。

この対立を民主党対共和党という表面的な構図で説明することは容易だ。ただ、筆者はアメリカ社会の対立構図を一般化したいと考えた。一般化すれば、アメリカ社会を見ることよって得られる教訓が、ほかの国、例えば、日本の社会問題を考える際の参考になるはずだからだ。なぜ何でもかんでも対立する分断社会になったのか。その背景についても論を展開していく。

取材は大統領選挙を翌年に控えた二〇一九年の夏に開始した。当時のドナルド・トランプ大統領も低支持率に苦しみ、次の選挙は厳しいというのがメディアの基本的な論調だっ

た。その見立ては、結果的には、はずれてはいなかったが、筆者は、トランプ大統領を当選させた有権者が簡単にトランプ支持をやめることはないと感じていた。そこで、その支持基盤は簡単には崩れないという前提に立って、アメリカ社会の諸問題を追っていくことにした。

三年に及んだ取材の結果、アメリカ社会の分断を俯瞰する際の軸の一つとして「科学」という概念が有効だという結論にたどり着いた。対立の一方の側には、科学、それに基づく合理的な判断を信じる人たちがいる。バイデン大統領はこちらに含まれる。もう一方の側には、科学に対する不信感、あるいは、科学を「錦の御旗」として掲げる人々に不信感を抱く人たちがいる。その不信感はまるで岩のように強固で揺らぐことがなく、ほとんど「信仰」の域に達している。本来、宗教の信仰とは、それ自体が揺らぐことはなく、他者を受け入れる寛容性や慈愛に満ちたものだと思ふ。例えば、宗教を超えた対話の機会に接した時にその思いを強くしている。しかし、「非科学主義者」たちは、その「信仰」のためには破壊行為も厭わないし、人の命が危険にさらされる事態になっても構わない。そんな彼らの属性を説明するために考えたのが「非科学主義信仰」という言葉だ。

トランプ前大統領がホワイトハウスを去ったのは二〇二一年一月二〇日。その直前の一月六日に発生したトランプ支持者による連邦議会議事堂襲撃事件をめぐる責任追及は現在も続く。それが、二〇二四年の選挙に勝利し、再び大統領になることを目指しているともみられるトランプ氏の勢いを削いでいる。しかし、「非科学主義信仰」が消滅したわけではない。バイデン政権にとって、一期目四年間の折り返しの、学校で言えば中間試験にあたる二〇二二年一月中旬選挙を見据えて、トランプ氏は存在感を示し続けている。

本書の核は、「非科学主義信仰」にはまった人たちをアメリカ各地で取材したルポである。NHKが日本を代表するメディアの一つであったとしても、アメリカでは海外の弱小メディアに過ぎず、取材のマンパワーには限界がある。毎日のニュースを構成する際には、アメリカのテレビ局や通信社が取材した素材、いわゆる「配信映像」を使うことも多い。日本の視聴者に伝えるべきニュースを日々もれなく放送するためには、こうした「効率的」な手段を取ることはやむを得ないのが現状だ。しかし、アメリカに住む人々の考えや気持ち伝えるリポートや番組は、自分たちで取材した映像で構成する。手間はかかるし、経費もかかる。アメリカは広い。移動だけで一日が終わることも多い。記者になって四半

世紀を超えるが、諸先輩からは「とにかく現場に行け、そして人の話を聞け」と教わってきた。この本は、そんな筆者が教わってきたことを実践した成果物でもある。

本書の構成は大きく前半と後半に分かれる。第一章は、「非科学主義信仰」にはまった人たちがアメリカ各地で行っている活動を取材したルポだ。信仰を超えて、もはや狂信的という表現がふさわしい彼らの実態に迫る。第二章では、「非科学主義」が政治と結合し、さらには突き動かしている現状を考える。そして、後半の第三章は、なぜ「非科学主義信仰」が発生したのか、また拡散しているのかを分析する。第四章では、この問題に私たちはどう向き合うべきか、その対策について論を展開する。

三年間で取材できたことは限られている。本書がアメリカのあらゆる社会問題を網羅しているとは思っていない。ただ、アメリカ社会の空気感をできるだけリアルに伝えるため、本書にはここで暮らす自分や家族の生活体験も盛り込んでみた。

「非科学主義信仰」のアメリカ人と言えば、一昔前のテレビによく出てきたUFOの目撃情報を熱く語る人物や、オカルト趣味にはまっている人物のことをイメージする方もいるかもしれない。あるいは、所詮は外国のことだと思う方もいるかもしれない。しかし、取

材すればするほど、実は日本も同じような問題を抱えているのではないかと、はっとさせられることもしばしばだった。アメリカで起きている問題は、太平洋の向こう側のことでなく、私たちにも関係することなのだ。